

作物野菜を試作研究し、当時とすれば、近代的農機具トラクター、麦の刈取機、脱穀機等を取り入れ、在来農法の革命を計ったものだった。二十名の若者が挑戦し、実績をあげ、表彰されたこともあったが、太平洋戦争の激化と共に団員は召集され減少の一途をたどり始めた。年少者だったわれわれにもその時が来始めたのであった。残された団員は終戦時には四十余人と聞く。

昭和十九年十一月、私は歩兵として現地シベリア近くの綏西に入隊。見送る人は一人もいない最後の平陽の地をあとにした。

翌年四月、幸運にも朝鮮の済州島に転属、ここで終戦の日を迎えたのであるが、満州のこと、すなわち平陽のことや、ソ連軍の侵入のこと等情報はいっさい知らされず、除隊後は必ず現地に帰り、再び開拓団の一員としてみんなといっしょに本格的に頑張る覚悟でいた筈が、しだいに情報が入り、それはとてもおぼつかぬこと。

大陸の夢は泡沫と消え去り、はかない運命となって

しまった。ただ、あの大陸から持ち帰った不屈の精神のみが今日の私を育ててくれた大きな土産物と信じ、あらゆる事柄にも取り組んでいます。

青春の想い出

岐阜県 森 下 虎 男

昭和十四年四月、氏神様の桜が美しく咲きほこっていました。満蒙開拓青少年義勇軍のタスキに真新しいカーキ色の青年服、そして戦闘帽、キャハン姿の四歳の私はいまは亡き友の梶村一幸と二人で氏神様の正面に立ち、おはらいを受け、出征兵士を送る時と同様、幟を先頭に五百メートル近い沿道を駅まで、駅前には村の人達が私達の送別のため多数来ておられました。

愛知県追進農場で一週間の予備訓練を終え、内原訓練所へ。初めて体験する団体生活が始まり、何千人かの若人が、満州開拓の希望に燃えて声高らかに、弥栄

を唱え、また威風堂々の分列行進等、その当時の光景はまさに日本の満州進出の前途洋々たる姿であり、天をもつく勢いでした。約二か月の規律ある軍隊式の訓練を終え、あこがれの満州へと渡って行ったのです。

雄大な大陸の眺めに胸おどらせつつ、ハルピン特別訓練所に入所しました。先輩達の赤銅色に陽焼けした顔やするどい目つきがおそろしいほどでした。

やがて次の訓練のため、牡丹江省の寧安訓練所に移行する時がきました。東京城の駅から、行軍で真暗な宿舎にたどり着いた時は、皆ががっかりしてしまいました。ランブ生活が始まったのです。

この訓練所は、大隊本部を中心に周囲に各中隊が点在しており、中隊ごとに独立した生活でした。警備はもちろんのこと、耕種・園芸・畜産・と分担し、それぞれの戦場で頑張ったものでした。

東京城駅に到着したわれわれの食糧物資等が訓練所途中にある三霊屯渡舟場を通るのですが、解氷期ともなると、川の増水で渡舟が不能となり、食糧類は入荷せず、一か月近くも毎日がこうりゃん飯と岩塩のスマ

シ汁で中味の具はニラの葉が二、三枚と想像しがたい食事の時もありました。

大東亜戦争の影響でしだいに食糧等も不足がちとなり、平凡な毎日の生活に若い心に迷いが生じ、前途を悲観して、離隊者が出発したのもこの頃からでした。

訓練を終え、いよいよ入植地へ佳木斯から北上して鶴岡炭鉱のある街までを列車で、街からまた十里近い、ソビエトの国境近く、三江省羅北鳳翔村まで徒歩で行ったところでした。佳木斯から、途中関東軍の国境警備陣地内を通り、眼前に広がる壮大な沃野はゆるやかな丘陵地帯と湿地等もある割合肥沃な土地でした。

部落の農作物の収穫も順調に増え、近くのある陸軍駐屯地への供出の野菜類は、馬車に積んでよく搬入したものでした。戦局はしだいに悪化して、私達もくりあげ徴兵とかで身体検査を受け、いつ入隊通知がきてもよいように心の準備をしていました。

やがて入営の日、雪が降っていました。残り少なくなった部落の同志がある材料だけで心温まるご馳走を作ってもてなしてくれました。

他部落の同日入営の者達と団本部に集合して、団長の激励を受けて、朝三時半頃本部を出発し、雪の中を徒歩で、オオカミの襲来に備え、大声で歌をうたったり、どなったりしながら駅のある鶴岡の街まで出たが、遂にこの日が開拓団最後の日となってしまいました。敗戦で私達の前途の望みは無残にも打ち砕かれました。満州開拓者にとってはあまりにも悲しく惨めな結果となってしまった。

私達の進んだ道は良し悪しは別として当時純粋な気持ちで、国のため、海外発展のために満州で活躍した数年間の青春は、絶対に無駄ではなかった、良い教訓であったことをこれから一生の糧にしたいと思っております。

同胞の死を無駄にせぬために

岐阜県 三尾 宇田子

「足音が高いぞ」前方からの押しこらした声に、息

をつめて、足をすべらせて進む一群の人たち……。「月が、いやに照りやがるなあ」ぼつんと誰かが言った。

すきつ腹に耐えかねて、命と取り替えになるかもしれないと思いながらも、私は收容所の鉄条網を抜け出した。畑から、とうもろこし等を盗むためです。

拉古收容所での食糧の配給は、家畜も食べない、黒い皮つきのコウリヤンめしと、レンガのように固い黒パンが少しでした。

收容所では、老人や子ども達が、発疹チフスと、栄養失調で、バタバタと倒れ、死んでいった。餓死寸前の私達は、けだもののように食を求めて、夜活動し、昼は死んだように眠るのです。

時計は、收容所へ来るまでに、山中で匪賊の襲撃にあったり、ソ連兵に取上げられて、時間も月日も、今日は何曜日などわからない毎日です。

露の玉が月光に輝いて、虫がしきりに鳴いています。ときどき足音に驚くのか、鳴き声がとだえ見張りの満人に見つからないように、すり足で行くのですが、と